



お誕生日席

9月27日
Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

9月27日のおはなし「お誕生日席」

お誕生日席という言葉がある。

細長いテーブルで、基本は長辺に沿って座るようにできている場合に生まれる現象だ。短い辺は本当に狭くひとりしか座れず、会議室とかなら議長席とも呼べるが、そうでないごく普通の家庭やお店のテーブルなら、なんとなく仲間はずれな感じがする、そういう席のことだ。

君は遅れて店に入る。みんなはもう集まっていて乾杯もすませて飲み始めている。予定より多く集まったらしくテーブルは早くも満員状態だ。そこでおなじみのフレーズが飛び出す。「ほら。お誕生日席、とっといたから」。君は頬にあいまいな笑みを浮かべそこにすわる。まただ。まただけど、このことをみんなに話そうかどうしようか。

迷っているうちにチャンスを逃して、その話をする事なく飲み会は続く。君はまた、この奇跡的な偶然を誰とも共有することなく、ひとり胸の内に秘めることになる。「まただ」とは言ったものの、君はそもそもお誕生日席に座ることは滅多にない。滅多にないと言うのは不正確だ。正確に言うとな年に1回しかない。年に1度きり、誕生日席に座る。そう。君自身の誕生日に。

覚えている限り、この現象は小学校6年生の時に始まって、以来ずっと20年間、毎年毎年正確に繰り返されている。決して他の日ではなく、正確に誕生日の当日に君はお誕生日席に座る。しかもそれはたいてい君の誕生日を知らない人の中での出来事だ。どうしてそんなことが起こるのか。誰かがきつと本当は誕生日を知っているんだ。最初はそう思った。けれどもじきにそれは違うことがわかる。その日初めて出会う人たちと同席するときにも、結果的にお誕生日席に座ることになる。無意識のうちに自分でその席を選び取っているのではないかと思ったこともある。例えば遅れて参加したりすることで。でもそれも違うことがわかる。最初から参加しているときでさえも、座席を調節しているうちにお誕生日席にすわる羽目になる。これが誕生日以外なら決してそんな風にはならないのに、である。

「実は今日誕生日なんだよ」という一言を言っても良さそうなものなのに、なぜかタイミングを逸し、そうなる誰かに「今日、誕生日だったりして」などと言われはしないか気になって仕方がない。言われたってかまわないはずなのだが、それをそこまで黙っていたことで変な気まづさが生まれそうに思ってしまうのだ。そうなるともう気が気でなくなる。

だから君は自分の誕生日にお誕生日席に座っている時ほどつらい時間はないと思っている。

そんなわけで今日も君は困った顔をしてその席に座っている。いったい何だつてめでたいはずの誕生日に、こんなつらい思いをして、よりによってお誕生日席なんかには座ってはいないんだ？ 不服に思いながらトイレで用を足していると、小柄な老人が入ってきて横に並ぶ。

「どうじゃ、楽しんどるかね」

「ええ。まあ」

合コンなのだ。お誕生日席のことを除けばまあ楽しくないこともない。

「どうして誕生日だと言わないんじゃ」

「は？」君は思わず老人を見つめる。「どうしてそれを」

「『どうしてそれを』っておめえ」急にべらんめえ調になって老人は答える。「おめえがそうしたいってえから、毎年そうしてやってるんじゃねえか」

「そうしたいって何を？」

「お誕生日席だよ。小学校の5年生の時に学校で誕生日に気づいてもらえなくて、一日中さびしい思いをして、そのことをうち帰ってもお母さんにも言えないで、ほら布団に入ってからベそかいて『来年からはちゃんと気づいてもらえますように』ってお祈りしたんじゃんかよう」

そうだった。5年生の時に自分でそう祈ったんだ。しかも誕生日だと気づいてもらうために！

「なんだよ。20年間無駄づかいだよ。こっちだって、おめえ、いつまでもボランティアでやってらんないよ」
「あなたは誰なんです？」
「なあに、神様なんて名乗るほどの者でもないよ」
「神様なんですか？」
「あれ？ わかっちゃった？」
「自分で言ったじゃないですか」
「ま、ま、ここはおれの前だからって、そんな、遠慮しなくていいから、楽しくやって」別に遠慮はしていなかったが、神様がそういうなら楽しくやろう。「さあ、とっとと行った行った」
「ありがとうございます」
「いいんだよ」
「じゃあ行ってきます」
「別に初詣に千円くれとか言わないからさ」
「初詣に行って、千円入れます」
「そうかい。すまないねえ」
「じゃあ」
「うん。がんばれ。うん。斜め前のヒトミちゃん、脈あるから」
「あ。マジですか。ありがとうございます」
「いいんだって。そんなしょっちゅうお詣りとか来なくてもいいから」
「月一回はお詣りに行きますよ」
「そうかい。すまないねえ」

こうして君はお誕生日を楽しく過ごすコツを見つけることができる。月一回のお詣りと、初詣の千円。そんなの、投資としては微々たるものだ。

(「お誕生日」 ordered by hell“o”boy-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

お誕生日席

<http://p.booklog.jp/book/34703>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34703>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34703>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.